

# 伊吹山の句について

寺田寅彦

青空文庫



昨年三月の「潮音」に出ている芭蕉俳句研究第二十四回の筆記中に

せんせんてい  
千川亭

おりおりに伊吹いぶきを見てや冬ごもり

という句について、この山の地勢や気象状態などが問題になっていて、それについていろいろ立ち入った研究があつたようである。私もこの問題については自分の専門の学問のほうからも特別の興味を感じたので、それについての私の考えを、その後小宮君こみやに話

した事があつた。当時その事について何か書いてみたらどうかという話もあつたが、充分具体的な材料が手もとになかつたから、ついそのままになつていたのである。近ごろ思い出して、急に材料を捜しにかかつたが、容易に見つからず、とうとう彦根測候所ひこねに頼んで、同所の筒井百平氏つついもへいから、必要な氣象觀測のデータを送つていただいて、それでやつと少しはまとまつた事を考えるだけの資料ができた。ここで改めて筒井氏の御好意に対してお礼を申し上げたい。

私がこの句に対して特別な興味を感じたのにはもう一つの理由がある。学生時代の冬休みに、東海道を往復するのに、ほとんどいつでも伊吹山付近で雪を見ない事はなかつた。神戸こうべ東京間でこ

のへんに限つて雪が深いのが私には不思議であつた。現に雪の降っていない時でも伊吹山の上だけには雪雲が低くたれ下がつて迷つてゐる場合が多かつたように記憶している。その後伊吹山に観測所が設置された事を伝聞いた時にも、その観測の結果に対して特別な期待をいだいたわけであつた。

冬季における伊吹山<sup>いぶきやま</sup>地方の氣象状態を考える前には、まずこの地方の地勢を明らかにしておく必要がある。琵琶湖<sup>びわこ</sup>の東北の縁にほぼ平行して、南北に連なり、近江<sup>おうみ</sup>と美濃<sup>みの</sup>との国境となつてゐる分水嶺<sup>ぶんすいれい</sup>が、伊吹山の南で、突然中断されて、そこに両側の平野の間の関門を形成している。伊吹山はあたかもこの関所の番兵のようにそびえているわけである。大垣<sup>おおがき</sup>米原<sup>まいばら</sup>間の鉄道線路は、

この顕著な「地殻ちかくの割れ目」を縫うて敷かれてある。

山の南側は、太古の大地変の痕跡こんせきを示して、山骨を露出し、

急峻きゆうしゅんな姿をしているのであるが、大垣おおがきから見れば、それほ

ど突兀とつこつたる姿をしていないだろうという事は、たとえば陸地測

量部の五万分一の地形図を見ても、判断する事ができる。大垣停

車場から、伊吹山頂、海拔一三七七メートルの点までの距離が、

ほとんどちょうど二十キロメートル、すなわちざつと五里である。

それから計算してみると、大垣から見た山頂の仰角は、相当に大

きく、たとえば、江えの島しまから富士を見るよりは少し大きいくらい

である。従つて大垣道から見て、この山はかなり顕著な目標物で

なければならない。もつとも伊吹以北の峰つづきには、やはり千

メートル以上の最高点がいくつかあるから、富士のような孤立した感じはないに相違ない。

問題の句を味わうために、私の知りたかった事は、冬季伊吹山で雨や雪の降る日がどれくらい多いかという事であった。それを知るに必要な材料として伊吹山および付近の各地測候所における冬季の降水日数を調べて送ってもらった。その詳細の数字は略するが、冬期すなわち十二月一月二月の三か月中における総降水日数を、最近四か年について平均したものをあげてみると、次のようである。

伊吹山

六九、二

岐阜  
岐阜

四十、二

敦賀<sup>つるが</sup>  
彦根<sup>ひこね</sup>

七二、八

五九、〇

京都  
名古屋<sup>なごや</sup>

四九、二

三〇、二

すなわち、伊吹山は敦賀には少し劣るが、他の地に比べては、著しく雨雪日の数が多い、名古屋などに比べると、倍以上になるわけである。冬季三か月間、九十日のうちで、約六十九日、すなわち約七十七パーセントは雨か雪が降る勘定である。筒井氏の調査によると、冬季降雪の多い区域が、若狭越<sup>わかさえちぜん</sup>前から、近江<sup>おうみ</sup>の北半へ突き出て、V字形をなしている。そして、その最も南の先端が、美濃<sup>みの</sup>、近江、伊勢<sup>いせ</sup>三国の境のへんまで来ているのである。従って、伊吹山は、この区域の東の境の内側にはいつているが、そ



れから東へ行くと降雨日数がずっと減る事になるわけである。

何ゆえにこのような区域に、特に降水が多いかという理由について、筒井氏の説を引用すると、冬季日本海沿岸に多量の降雨をもたらす北の季節風が、若狭近江の間の比較的低い山を越えて、そして広い琵琶湖上から伊勢湾のほうへ抜けようとする途中で雪を降らせるというのであるらしい。特に美濃近江の国境の連山は、地形の影響で、上昇気流を助長し、雪雲の生成を助長するのである。

また伊吹山観測所で霧を観測した日数を調べてみると、四か年間の平均で、冬季三か月間につき七六、八日となっている。つまり冬じゅうの約八割五分は伊吹山頂に雲のかかった日があるわけ

になる。もつともそれだけでは山頂が終日全部おおわれているかどうかはわからないが、ともかくもこの山がそのままによく見える日がそうそう多くはないという事だけは想像される。

以上の事実を予備知識として、この芭蕉の句を味わってみるとなると「おりおりに」という初五文字がひどく強く頭に響いて来るような気がする。そして伊吹の見える特別な日が、事によると北西風の吹かないわりにあたたかく穏やかな日にでも相当するのだ、そういう日に久々で戸外にでも出て伊吹山を遠望し、きょうは伊吹が見える、と思うのではないかとまで想像される。そうするとまたこの「冬ごもり」の五字がひどくきいて来るような気がするのである。

これはむしろ学究的の詮せんさく索に過ぎて、この句の真意には当たらないかもしれないが、こういう種類の考証も何かの参考ぐらいにはなるかもしれないと思って、これだけの事をしるしてみた。もし実際の地方で、始終伊吹を見ている人たちの教えを受けることができれば幸いである。

（大正十三年二月、潮音）



# 青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第二卷」小宮豐隆編、岩波文庫、岩波書店

1947（昭和22）年9月10日第1刷発行

1964（昭和39）年1月16日第22刷改版発行

1997（平成9）年5月6日第70刷発行

入力：（株）モモ

校正：かとうかおり

2003年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 伊吹山の句について

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>